説教要旨『苦しみのゆくえ』

ローマの信徒への手紙 5 章 1〜5 節

「苦しみは、時の流れと共に消え去っていく」。そのように語られることがあります。確かに、今となっては思い出せないような苦しみがあります。しかし、それは程度によります。人を傷つけたり、人から傷つけられたり、愛する者との不条理な別れに直面したり…忘れ去りたくても決して脳裏から離れない苦しみの経験が人には少なからずあります。死ぬときには、全てを忘れ去ることができるのかもしれません。ですが、死ぬまで、ただ耐え忍ぶしかないということでは、「今」を生きる私たちにとっての慰めは一体どこにあるのでしょうか。

聖書が語るのは、「苦しみが消え去る」ことではありません。「消え去る」のではなく、時の経過と共に苦しみの意味が見出されること、「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望」（3〜4 節）へと、その姿や意味合いが変えられていくことを示しています。誰も、行き先の分からない電車には乗りません。どこに連れて行かれるか分からない電車に乗るとすれば、それは不安や恐れでしかありません。私たちの抱く苦しみもまた、同様です。その苦しみがどこへ向かっているのか分からないことが、今を生きる私たちに恐れや不安、憎しみを抱かせます。だからこそ本日の手紙を記したパウロははっきりと示しています。「苦しみのゆくえは、希望である」と。

パウロは、この苦難から生み出される希望が、「わたしたちを欺くことはありません」（5 節）としています。なぜなら、「わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです」と信徒たちに語ります。誰にも理解されず、罵倒され、愛する弟子にまで裏切られ、それでもなお、人々を愛し続けたイエスの生涯。しかし、そのイエスの苦しみは苦しみのまま終わることも、消え去ることもなく、時を超えて今、「愛」に姿を変えて、あなたがたの心に刻まれている。これこそが、苦難から生まれる「希望がわたしたちを欺くことがない」証ではないかとパウロは訴えています。

苦難から生み出される希望、つまりそれは「愛」です。私たちの苦しみは、「愛」に向かおうとしているのです。人の悲しみを受け入れるようになるため、泣く人と共に泣けるような人になるため、人を心から愛することができるようになるため、そんな希望の人へと創り上げるために、神は私たちの苦しみを決して無駄にはされません。「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」。そんな神の約束（未来）から、今の苦しみを見つめてみる。それこそが、聖書の求める苦しみの受けとめ方です。

（文責：望月達朗牧師）